関係人口と協働する【コミュニティ活性】

2023 持続可能な集落創造プロジェクト

実施者

≪教　員≫　千葉工業大学 社会システム科学部 プロジェクトマネジメント学科　教授 加藤 和彦

≪学　生≫　千葉工業大学 社会システム科学部 プロジェクトマネジメント学科 加藤和彦研究室　27 名

スンデリヤ（院），荒川 (4)，荒木 (4)，池田暁音 (4)，池田桂菜 (4)，岩本 (4)，大下 (4)，栗原 (4)，外尾 (4)，中村 (4)，橋本 (4)，平川 (4)，松井 (4)，吉田 (4)，渡邉 (4)，阿部 (3)，大橋 (3)，鈴木 (3)，竹内 (3)，棚田 (3)，内藤 (3)，永澤 (3)，中村 (3)，橋本 (3)，細見 (3)，本田 (3)，宮本 (3)

≪南房総市内での連携・協働パートナー≫

【行　政】南房総市役所 市民生活部 市民課 市民協働グループ　【企業等】みねおかいきいき館

【市民団体等】南房総市大井区会，大井区自主防災組織かわせみ，大井区子供会，大井青空クラブ

1. 背景・目的

①背景

本プロジェクトは，持続可能な集落創造の目的のもと，地域が望む将来像に合わせた新たな地域運営の仕組みづくりと次世代のリーダー発掘・育成を行い，持続可能な集落を形成することを目指しており，千葉工業大学 鎌田研究室，加藤研究室，中川研究室，磯野研究室，藤木研究室がお互いの強みを活かして協働で取り組んでいる。本報では，加藤研究室が中心となって取り組んできた「関係人口」が地域に及ぼす影響についての経年調査等の結果を報告する。

②目的

「関係人口」による地域への影響及び活性化要因の調査・分析：
南房総市民の防災意識調査

2. 実施内容

①実施期間

２０２３年４月～２０２４年３月

②活動内容

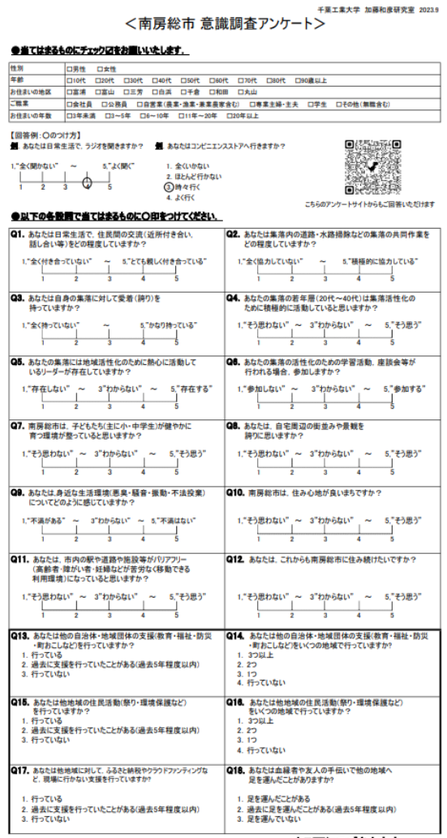
本年度はコロナ前の状況に一気に戻ると思われたが，依然として地区の祭礼や主要行事が中止となるところが多くあり，学生（関係人口）と区民との対面交流を深めることは困難であったが，老人会行事への参加，活動拠点である「学び舎じんべゑ」やゆず畑の運用・整備を継続した。このような活動を通じて「関係人口」が地域に与える影響を把握するため，昨年度に引き続き意識調査アンケートを行った。今年度も，大井区を含め市内 5 地区を対象範囲に調査を実施した。本報では，2020 年度から継続している防災に関する自助・共助意識調査の結果について報告する。

持続可能な集落創造の実現へ向け，本研究室が取り組んでいる，『関係人口』による地域の活性化についての研究成果が課題解決のカギになると考えており，南房総市全体への波及を見据えて今後も継続して調査・分析を実施していく。

3. 成果と課題

（1）地域貢献面

災害による被害を最小限に抑え，早期に復旧するためには，地域コミュニティにおける自助・共助が極めて重要な役割を果たすことが明らかになっている。特に大規模災害では，行政の人的・物理的資源も限られているため，自分たちで身を守り，近隣の人々と助け合うことが求められている。近年，公助だけでは住民の安全を守ることができないという認識が広まり，行政からも住民の自助・共助に強い期待が寄せられている [1]。しかし，近年の地域コミュニティの希薄化，急激な人口減少と高齢化による地域コミュニティの崩壊により，住民の自助・共助意識が低下傾向にある。地域防災力を高めるためには，行政に過度に依存するのではなく，住民が協力し合って自分達で守るという自助・共助意識を高める必要がある。これらの背景から本研究室では，南房総市の住民の防災に関する自助・共助意識を調査するために藤見らの研究 [2] を基に，2020 年から 2022 年までの 3 年間継続してアンケート調査を実施している。また，地域活力やソーシャル・キャピタル（以下，SC），関係人口についてのアンケートも南房総市で継続して実施している。渡邉の研究 [3] では，南房総市の大井区を対象に同様のアンケートを実施し，SC が防災意識に及ぼす影響について比較・分析を行った。渡邉の研究 [4] では南房総市の全 7 地区を対象にアンケート調査及び分析を実施した。丸茂の研究 [5] では，東京都新宿区内の 115 の町会・自治会を通じて実施した自主防災意識のアンケートを分析した。共分散構造分析によりパス図を用いたモデリングを行なって，地域防災力と SC の関連性について検証した。



千葉工業大学　加藤和彦研究室　2023.9

＜南房総市 意識調査アンケート＞

◉当てはまるものにチェック☑をお願いいたします。

性別	□男性　□女性
年齢	□10代　□20代　□30代　□40代　□50代　□60代　□70代　□80代　□90歳以上
お住まいの地区	□富浜　□富山　□三芳　□白浜　□千倉　□和田　□丸山
ご職業	□会社員　□公務員　□自営業(農業・漁業・兼業農業含む)　□専業主婦・主夫　□学生　□その他(無職含む)
お住まいの年数	□3年未満　□3～5年　□6～10年　□11年～20年　□20年以上

【回答例：○のつけ方】

Q. あなたは日常生活で，ラジオを聞きますか？

1."全く聞かない"　～　5."よく聞く"

1　2　3　④　5

Q. あなたはコンビニエンスストアへ行きますか？

1. 全くいかない
2. ほとんど行かない
③ 時々行く
4. よく行く

こちらのアンケートサイトからもご回答いただけます

◉以下の各設問で当てはまるものに○印をつけてください。

Q1. あなたは日常生活で，住民間の交流（近所付き合い，話し合い等）をどの程度していますか？
1."全く付き合っていない"　～　5."とても親しく付き合っている"
1　2　3　4　5

Q2. あなたは集落内の道路・水路掃除などの集落の共同作業をどの程度していますか？
1."全く協力していない"　～　5."積極的に協力している"
1　2　3　4　5

Q3. あなたは自身の集落に対して愛着（誇り）を持っていますか？
1."全く持っていない"　～　5."かなり持っている"
1　2　3　4　5

Q4. あなたの集落の若年層（20代～40代）は集落活性化のために積極的に活動していると思いますか？
1."そう思わない"　～　3"わからない"　～　5."そう思う"
1　2　3　4　5

Q5. あなたの集落には地域活性化のために熱心に活動しているリーダーが存在していますか？
1."存在しない"　～　3"わからない"　～　5."存在する"
1　2　3　4　5

Q6. あなたの集落の活性化のための学習活動，座談会等が行われる場合，参加しますか？
1."参加しない"　～　3"わからない"　～　5."参加する"
1　2　3　4　5

Q7. 南房総市は，子どもたち（主に小・中学生）が健やかに育つ環境が整っていると思いますか？
1."そう思わない"　～　3"わからない"　～　5."そう思う"
1　2　3　4　5

Q8. あなたは，自宅周辺の街並みや景観を誇りに思いますか？
1."そう思わない"　～　3"わからない"　～　5."そう思う"
1　2　3　4　5

Q9. あなたは身近な生活環境（悪臭・騒音・振動・不法投棄）についてどのように感じていますか？
1."不満がある"　～　3"わからない"　～　5."不満はない"
1　2　3　4　5

Q10. 南房総市は，住み心地が良いまちですか？
1."そう思わない"　～　3"わからない"　～　5."そう思う"
1　2　3　4　5

Q11. あなたは，市内の駅や道路や施設等がバリアフリー（高齢者・障がい者・妊婦などが苦労なく移動できる利用環境）になっていると思いますか？
1."そう思わない"　～　3"わからない"　～　5."そう思う"
1　2　3　4　5

Q12. あなたは，これからも南房総市に住み続けたいですか？
1."そう思わない"　～　3"わからない"　～　5."そう思う"
1　2　3　4　5

Q13. あなたは他の自治体・地域団体の支援（教育・福祉・防災・町おこしなど）を行っていますか？
1. 行っている
2. 過去に支援を行っていたことがある（過去5年程度以内）
3. 行っていない

Q14. あなたは他の自治体・地域団体の支援（教育・福祉・防災・町おこしなど）をいくつの地域で行っていますか？
1. 3つ以上
2. 2つ
3. 1つ
4. 行っていない

Q15. あなたは他地域の住民活動（祭り・環境保護など）を行っていますか？
1. 行っている
2. 過去に支援を行っていたことがある（過去5年程度以内）
3. 行っていない

Q16. あなたは他地域の住民活動（祭り・環境保護など）をいくつの地域で行っていますか？
1. 3つ以上
2. 2つ
3. 1つ
4. 行っていない

Q17. あなたは他地域に対して，ふるさと納税やクラウドファンディングなど，間接に行かない支援を行っていますか？
1. 行っている
2. 過去に支援を行っていたことがある（過去5年程度以内）
3. 行っていない

Q18. あなたは血縁者や友人の手伝いで他の地域へ足を運んだことがありますか？
1. 足を運んだことがある
2. 過去に足を運んだことがある（過去5年程度以内）
3. 足を運んでいない

ウラ面につづきます↓

図 1　防災意識の推移

域学協働の工夫！

★地域内のコミュニティの枠にとらわれないサポーター人材を発掘・育てること
★地域内の次世代中核人材が（モチベーションアップや訓練としての）チャレンジできる場を創出すること
★マンパワー・活力としての学生が存在すること
★中立・公益性のあるドライバー（学生・教員等）により地域住民の意見を抽出すること
★遊び心，余裕を持つこと

そこで，本研究では藤見，渡邉らの研究 [2][3][4] を基に南房総市の住民の自助・共助意識調査アンケートを実施し，調査を開始した 2020 年から 2023 年までの 4 年間の防災に関する自助・共助意識の経年変化を分析する。また，丸茂の研究 [5] を基にその要因について他のアンケート項目から得られた結果などから影響を分析し関連性についてモデリングを行うことにより，多角的な視点から防災に関する自助・共助意識の向上のための対策について検討を行う。

「南房総市 意識調査アンケート」による 4 年間の防災意識の推移（図 1）では，2021 年，2023 年の調査で上昇していることが分かる。この要因として，千葉県内及び南房総市で 2021 年，2023 年に台

*参考文献

[1] 河田恵沼：大規模災害による人的被害の予測，自然災害科学，Vol.16，pp.3-14，1977

[2] 藤見俊夫，他：ソーシャル・キャピタルが防災意識に及ぼす影響，自然災害科学，Vol.29，No.4，pp.487-449，2011

[3] 渡邉隆史，南房総市におけるソーシャル・キャピタルが防災意識に及ぼす影響，2020 年度千葉工業大学卒業論文，2020

[4] 渡邉拓弥，南房総市におけるソーシャル・キャピタルが防災意識に及ぼす影響−南房総市全 7 地区での調査及び比較分析−，2021 年度千葉工業大学卒業論文，2021

[5] 丸茂雄一：新宿区民の自主防災活動とソーシャル・キャピタル - 防災アンケートを分析して - ，社会研究資本論集，第 2 号，pp.49-78　2011

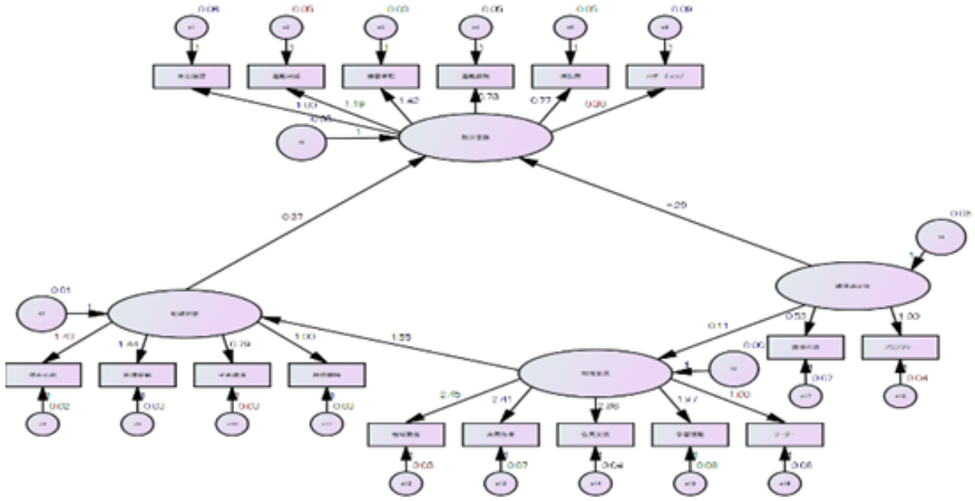


図 2　防災意識と地域活力のパス図

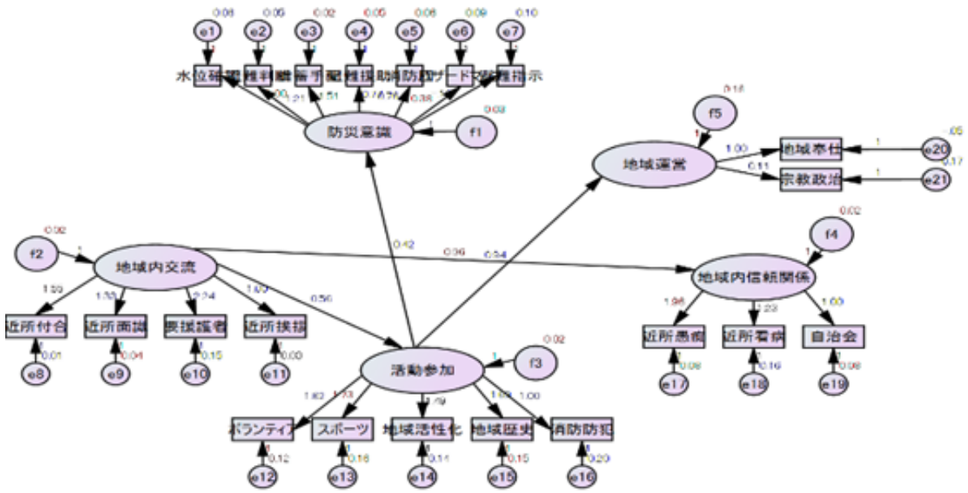


図 3　防災意識と SC のパス図

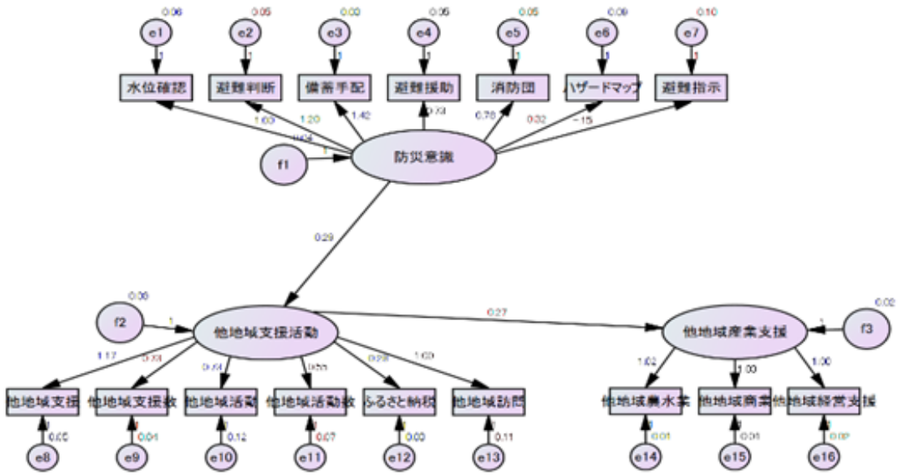


図 4　防災意識と関係人口のパス図

風や地震などの大きな災害が起こっていることが関係していると推測した。その他のアンケート項目でも同様に調査年毎の推移を調査したが，どのアンケート項目も防災意識との相関は見られなかった。更に，各年齢の防災意識指数の推移も調査したが，40 代のみ経年と防災意識指数の弱い正の相関が見られたが，他の年齢では相関が見られなかった。各調査年の防災意識指数と年齢の相関についても調査したが，防災意識指数と年齢に相関は見られなかった。

図 2，図 3，図 4 は防災意識とその他のアンケート項目との関係を共分散構造分析によりモデル化したものである。防災意識と地域活力のパス図（図 2）では，居住する地域に対する好感度と防災意識は正の相関を示した。防災意識と SC のパス図（図 3）では，地域の活動に積極的であるほど防災意識が高くなる傾向を示した。図 3 と丸茂の研究 [5] のパス図を比較すると，同様に SC と防災意識は正の相関を示していた。防災意識と関係人口のパス図(図 4)では，他地域支援活動と防災意識は弱い正の相関を示した。

まとめとして，本研究では，「南房総市 意識調査アンケート」を実施し，本年度の調査結果を含めた 4 年間の推移について分析した。また防災意識とその他のアンケート項目との関係性をモデル化して検証するために共分散構造分析を行った。その結果，南房総市民の防災意識は 4 年間で上昇傾向にあったが，他の項目の推移からはその要因は分からなかった。しかし，直近の千葉県内で発生した災害が住民の防災意識に影響を与えている可能性があると推測した。共分散構造分析により防災意識と他の要素の関係性について分析・モデリングした結果，地域活力と SC は住民の防災意識と正の相関を示した。以上のことから，住民の防災意識には直近の災害の有無や被災体験が影響する他に，地域活力や SC も少なからず影響を与えていることが今回の分析で分かった。

本分析から，地域活力の観点で防災意識の向上を促すためには，住民が地域に対して好感を持つような景観や街並みのアピール，子育て環境の整備に取り組むことで間接的に防災意識の向上に繋がる。SC の観点で考察すると，地域で行われている活動への積極的な参加を促す，または幅広い年齢層や男女問わず参加可能なスポーツイベントで多くの交流を生むことが，間接的に防災意識の向上につながると考えられる。

（2）教育・研究面

本研究の成果では，住民の防災意識は，その地域活力やソーシャル・キャピタルとの相関が確認された。地域活力やソーシャル・キャピタルは「関係人口」との相関があることが分かってきている。したがって，「関係人口」の意義を明らかにし，その促進をもって地域活性化に繋げていきたい。加えて，学生が地域に対する興味関心を持つ機会でもあり，郷土愛や異文化理解の醸成など教育面の効果も高いと考える。

4. 今後の展開

現在は，南房総市地域住民の基本特性が概ね把握できた段階である。今後はそれら特性の分析を進め，彼ら自身が持っている持続可能な集落創造への関心を探し出す段階，そして，どうやってそれらを行動へ繋げていくかの段階に展開していく。これらは「関係人口」の効果的活用がカギを握っていると我々は考えている。

＊表彰・マスコミ掲載など

・特になし